

# 年間1万1500ℓ・132万円余の燃費削減

～ 大型増トン車2台・トレーラ3台の改善チームで…川崎陸送（本社・東京都港区）～

川崎陸送（本社東京都港区、樋口恵一社長）は6月18日、東京・新宿区の東京貨物運送保険組合会館で、QCサークル代表大会を開催した。

同社では消費の低迷などの影響を受け、前年度は減収減益となった。しかし、神奈川県内の新拠点や博多での通関事務所の開設など将来に向けての積極的な投資も行っている。川崎陸送では、これまでも種を撒いてから4、5年で実績につながってきており、そしたら次の種を撒くという形で発展してきた。それを支えているのが改善活動で、改善を通してより高い業績を生み出してきたのである。

同社の今期の経営方針は、①今の仕事に新しいやり方を採り入れる（自分たちの生活も変化しているのだから、とりあえず新しいやり方をやってみる）、②情報の共有化を行う（何でもネットで調べる人は友人がいない人、直接のコミュニケーションを通しての情報共有が大事）、③今期中に1人最低4つの提案を行う（普段から頭を使うようにする）、④エリア内資源の有効活用をさらに進める（エリア内で助け合って効率化を図る）。

このような今期の基本方針も踏まえながら、ブロック予選を勝ち上がってきた10チームがそれぞれの取り組みを発表した。審査の結果、武蔵村山営業所のチーム名「TEAM634」が優秀賞、京都営業所の同「MIX ジュース」が優良賞、山口営業所の同「関門海峡」が努力賞を受賞した。また、個人による優秀提案では、最優秀賞1人、優秀賞4人、努力賞4人が提案内容、改善・効果などについて発表した。

ここでは、優秀賞を受賞したTEAM634の改善の取り組みの概要を紹介する。

TEAM634は、大型増トン車に乗務するドライバー2人とトレーラに乗務のドライバー3人の計5人で構成する改善チームである。荷主は大手飲料メーカーで、飲料水を輸送している。全員がドライバーなので、全メンバーが一堂に会して話し合う機会を設定するのがなかなか難しい。そのような不利な条件をカバーするために、チャットでの意見交換も取り入れたという。

改善テーマの設定では、燃費の向上パート5、運転時のヒヤリ・ハット削減、拘束時間の短縮（残業時間の削減）、その他の候補が出されたが、その中の燃費向上をテーマに設定した。パート5としたのは、同チームではこれまでも燃費改善に取り組んできていたからである。燃費の向上では、すでにかなりのレベルに達しているが、これまでの成果の上に立って、さらに今回は総集編といった位置づけで改善に取り組んだのである。

燃費向上のための課題としては、①高速道路1400/rpmを超えない、②1200/

rpm 以内にシフトアップする、③発進時ノーアクセル1転がりスタート、④アイドリングストップする、⑤時速50kmを超えたら7速で走行する、⑥先の信号を見てアクセルの調整をする、⑦排気ブレーキを切り惰性運転をする、の7項目を挙げた。各項目を0～5点(35点満点)でレーダーチャート化して現状を把握し、全車両25点以上を目標に設定した。

このうち、④のアイドリングストップ、③の発進時1転がりノーアクセル、⑥の先の信号を見てアクセルを調整の3項目が、現状把握からは重要課題であることが分かった。要因の分析では、④と⑥は人的要因であり、③は運転方法である。

そこから④③⑥の3項目については以下のように燃費向上への改善手段を系統化した。

(第1手段)	(第2手段)	(第3手段)
④アイドリングストップ	暑さ寒さ対策	扇風機や蓄熱マットの使用
	待機時にエンジンを切る	休憩所を利用する
	余分な暖気運転をしない	エア漏れを治す
③発進時ノーアクセル	アクセルペダルを踏まない	ブレーキの活用方法
	上り坂の手前で止まらない	下り坂を利用する
	信号のタイミングを見る	連動信号機は記憶する
⑥先の信号を見る	歩行者信号を見る	無駄にアクセルを踏まない
	先の先を見る	排気ブレーキの有効活用
	連動信号の確認	信号機のタイミングを記憶

他の4項目についても、⑦排気ブレーキは常に切って必要な時だけONにする、②タコメーターに気を配り早目のシフトチェンジをしてアクセルはゆっくりと踏む、①オートクルーズを使用してタコメーターやスピードメーターに気を配り無理な追い越しをしない、⑤スピードメーターに気を配りエンジン音を聞いて速度に合わせたシフトアップをする、といった改善への手段を講じている。

このような取り組みの結果、全車両とも25点～33点内に入り目標の25点以上はクリアした。5台の平均は28.6点である。もちろん、各車両ともレーダーチャートの輪が大きくなっている。

5台の車両について、年間走行距離とその年度の平均燃費から消費軽油量を算出したものと、改善に取り組んだ期間の平均燃費で算出した消費軽油量を比較した。その結果、年間換算では削減された軽油の合計が1万1517ℓ、金額換算すると132万4455円の経費削減となった。これはドラム缶(200ℓ)で約58本分の削減であり、CO<sub>2</sub>換算では約2173本の杉の木を植樹したことに相当するという。

この改善チームでは、この取り組みを標準化し歯止めをかけて定着を図る。同時に今後の課題なども全員で確認した。